

# おじさんは

# 白馬に乗って



連載 / 第108回

文 高橋源一郎 絵 しりあがり寿

## 天国へのお引越し

タカハシさんは、ずいぶん前から「老人文学」の熱心な読者である。古い先短い老人たちの書いたものには、小説でも、エッセイでも、若者ややる気満々の壮年の人たちのものにはない、落ちつきと憂いがある。中には明らかに「ボケ」始めているものもあるが、それが「芸」になってしまふところが「老人文学」の素晴らしさだ。

小説やエッセイで味をしめたタカハシさんは、さらに上野千鶴子さんがお書きになってベストセラ―街道蔭進中の「おひとりさまの老後」を筆頭とする「晩年の暮らし方」本から、痴呆症や認知症等々の老人病や介護、老人ホームから遺書の書き方、そしてお墓に関する本まで読んだ。

もう、シミュレーションは完璧である。いつ老人になっても大丈夫。カモン、「若い」!

そう思っていたタカハシさんは、一冊の本を手にとり、自分の浅はかさ気づいたのである。まだまだ知らないことがあったのだ。

その本のタイトルは「遺品整理屋は見た!」。

著者の吉田太一さんは、日本で

初めて遺品整理専門会社を設立された方である。

「遺品整理専門会社」? はて、そんなものがオレに関係あるのか、と思われる読者も多いかもしれない。だいたい、遺品の整理は遺族がするもので、赤の他人に頼む筋合いではない。

甘いです。

それは、あなたが、亡くなる日まで、ずっと家族と一緒にいると思いきや、

定年になり、やれ嬉しや、これからやっと好きなことをして暮らせると思つたら、いきなり、奥さんから「離婚してください」と言われるおじさんたちが増えているそう。子どもだって、いつかあなたの下を巣立ってゆく。

気がついたら広い家にひとり。さあ、たいへん。何十年も家事なにかしたことがないし、洗濯機の使用方もわからない。米……米……とぐんだっけ?

そこから先ずつと、あなたは、たったひとりで暮らしていかなければならないかもしれないのだ。

晩年をひとりで暮らすいわゆる

「独居老人」が増え、その結果として当然「孤独死」も増加の一途をたどっている。

そう、「遺品整理専門会社」は主として「孤独死」(その変種としての自殺)してしまった人の遺品を整理する会社なのである。

ひとりで、誰にも知られずに死んでしまったとしよう。いったい、どうなるのか。どうやら、たいへん悲惨な状態になるらしい。

「関西のとある地方都市にある集合住宅の一階で、ひとりの男性が亡くなっていました。発見されたときにはすでに死後二週間が経過しており、部屋は強い死臭とあたりを徘徊する無数のウジ虫で、ご家族が立ち入ることはとてもできない状態ではありませんでした」とか、

「死体見て警察の人が感心してましたよ」

「どうしてですか?」

「いやあ、二週間もよくぶら下がってましたねえ」って……。もう少して首が千切れていたかもしれない。それです。」といった有様なのだ。

いくら、死んだ後のことなんかどうでもいいと思っても、やはりここは、もしかしたら見つけてく